

# 戴冠せるアナルシー

——ドゥルーズ・ガタリの哲学にかんする試論——

小谷 晴 勇

## 序

一九九二年八月二十九日、フェリックス・ガタリが死んだ。それはガタリ個人の死であると同時に、『アンチ・エディプス』以来のドゥルーズ・ガタリの作品系列の終わりを告げる出来事でもある。これを機に、彼らの仕事をふりかえって考えてみたい。もとよりドゥルーズ・ガタリの諸作品は、ガタリの仕事の一部であり、全体ではない。ここに論考の対象を限定するのは、筆者の個人的な力量の限界によってである。ガタリの仕事の全体を顧みて考察することは、現在の筆者の能力を越える課題である。それはまた後日を期すことにしたい。

## 一 〽多様性〴〵の哲学

「我々は、多がなにかに帰属することをやめ、実名詞の状態にまで高まったときに、なにをはらんでいるかを、まだ知らないのである。」<sup>[1]</sup>  
ドゥルーズ・ガタリの仕事は、まずこの一言に集約される。多を実名詞にまで高めること、それが彼らの課題である。「多を実名詞の状態にまで高」といふことは、絶対的な多をつくり出すということである。引用文のなかで「多」multipleと呼ばれているのは、じつはこの絶対的な多のことである。絶対的な多は、彼らによって〽多様性〴〵 multipleと名づけられる。〽多様性〴〵とは決して「一」に収束せず、また「一」を前提とすることもしない絶対的な多のことである。したがって〽多様性〴〵とは、「伝統的な哲学概念である」「多」multipleとは異なる。「多」と

は、個別的要素「一」の集積としての「多」である。「多」は「一」と対立するものと考えられるが、それが「一」の集積であるかぎりにおいて、「多」は「一」を前提とするものともいえる。これに対して「多様性」は「一」を前提としない多性、多性としての絶対的な多である。「多様性」とは、「一」を前提とすることなく、「一」に収束することもない、絶対的な多である。

巨視的に見て西洋の哲学的伝統は、究極的存在としての「一」「一者」の探究であり、それをめぐって行われた思索であった。パルメニデスにはじまるこの伝統にたらなる哲学は、プラトンのイデア論、アリストテレスの存在を存在せしめるものの探究としての第一哲学、超越的一神教としてのキリスト教の哲学化たる教父哲学、神学と哲学の統一をこころみたトマスを頂点としたスコラ哲学、コギトを出発点としたデカルト、神に酔えるスピノザ、先験的主観を認識の根源とするカント、運動する「精神」を根源に据えたヘーゲル、等々枚挙にいとまない。「一」こそあらゆる存在と価値の源泉であり、またそのようなものとしての「一」を探究することが哲学の役割・使命であったのだ。

これに対しドゥルーズ・ガタリは、探究されるべきものは「一」ではなく、いかなる「一」をも前提とすることなく、またいかなる「一」に収束することもない「多様性」こそが哲学的探究の対象であると主張する。哲学が概念化しなければならないのはこの絶対的な多としての「多様性」であり、さらに哲学はそれを肯定すべき価値として主張しなければならない。我々は「多様性」を概念化しつつ、同時にさまざまな領域の実践において「多様性」を創造し、実現しなければならない。これがドゥルーズ・ガタリの主張である。「多様性」を「多様性」として概念化し、それが純粹な肯定の対象であり、価値であることを示すことが、彼らの思想の最大の課題である。

まず、このような「多様性」の概念化のこころみが、彼らによってどのような過程をへて実現されたかを、以下の部分で瞥見することにしよう。

## 二 遭遇、そして二人で書くということ

実際に哲学者のドゥルーズが精神科医のガタリに出会ったのは、六八年の五月革命が終息した直後のことである。一九二五年生まれのドゥルーズは、それまでヒューム、ニーチェ、ベルクソンなどの研究でいられていたが、それはもとよりアカデミックな領域での仕事であり、地道な研究者であったといえる。それより少し年下で一九三〇年生まれのガタリは、精神科医にして左翼の活動家というユニークな人物で、またラカン

派精神分析を学んでいた。構造主義に深い影響を受けながら、それに理論的な裁定を下したいと考えていたドゥルーズは、ガタリのうちに元ラカン派の内部告発を見出した。そしてニーチェがルー・サロメに言い寄るとき性急さで、二人で仕事をすることを提案する。これが現代思想界にドゥルーズ・ガタリの名が登場することになるきっかけである。<sup>(1)</sup>

革命は反動的な収束へと導かれた。現実の社会的変動はふりもどされ、すでになにもなかったかのごとくである。けれどもそこで提起された問題は、決して消えてなくなるものではない。社会が変わらないかぎり、そこで提起された問題は生き続けているのだ。まず手始めに精神分析を問題とすること。社会と不可分のはずの人間精神を深層から問題にするはずの精神分析において、いかに社会的・政治的問題が等閑視されていることか！まず我々、精神分析医や構造主義にコミットした知識人にとっての日常的現実である精神分析からはじめて、告発すること。ひろい社会的問題を等閑視し、家庭に内閉する精神分析を告発すること。それからこそ真に地に足のついた革命がはじまるのではないか。われわれの課題は精神分析の家族主義の批判だ。だとしたらスローガンは「アンチ・エディプス」だ。エディプス・コンプレックスの概念こそ精神分析の中核をなし、その家族主義を構成しているのだから。われわれのプログラムはこうだ。エディプス・コンプレックスの批判からはじめて、精神分析を告発すること。そして広い社会的な問題が人間精神に与える影響をそのままリアルに捉えられるような方法を構築すること。それによって社会変革へと導くこと。そのためにもまず精神分析批判をはじめようではないか！こうして生みだされたのが『アンチ・エディプス』なのである。

ところでこの本の内容に立ち入る前に考えておきたいことがある。それは二人で本を書くということについてである。この二人で思想・哲学的な著作を書くということは、考えてみればずいぶん異例なことである。おもいあたる先例はマルクスとエンゲルスくらいなものであるだろうか？二人で書くといっても、各々の専門領域にしたがって執筆箇所を分担する、というやりかたとは全くちがっている。そういったやりかたならいくらでもありえるし、さほど困難でもないだろう。例えば、哲学者が原論・基礎理論を担当し、精神医学者が、実践・応用編を担当するとうやりかたである。

しかしドゥルーズ・ガタリの場合、執筆箇所の分担ということはない。どこがドゥルーズの書いた部分で、どこからガタリの書いた部分かというところは、わからないのである。そして根本的にいえば、そもそもそのような詮索が無意味なのである。

執筆箇所を分担するやりかたによる共著と、ドゥルーズ・ガタリのそれが根本的にどのように違うかという点と、前者においては各々の立脚点が明確に自己同一性を保っているのに対して、後者がそれを捨てているということである。前者では、おのおののアイデンティティーはそのままで、というよりそれにもとづいて、専門的な知識を提出しあつて仕事の全体を形づくっていくのである。しかしながら、ドゥルーズ・ガタリの場合にはそうではない。ドゥルーズ・ガタリの著作において、ドゥルーズはもはや、あのスピノザ論で緻密な思考をアカデミックな規範にのっとりて展開したドゥルーズではない。かれは自己同一性を失つたかたちで仕事に参加している。ガタリもまた、汲めども尽きぬ創造力・発想が散乱して、見通しのよい形式のうちに完結することを不断に拒むあのガタリではない。ハイフンで結ばれたドゥルーズ・ガタリが、ドゥルーズとガタリの（つまり1+1の）算術的な和でないことは明らかだ。二人で書く・哲学するということは、自己同一性を失うための方法である。もちろんそれは、∧多様性∨にむかつて生を充実させるための喪失である。

二人で仕事をするに書くということ自体が、∧多様性∨をつくり出すことである。それは一人ではなく二人というだけではない。後に彼らも述べているように、それぞれがすでに幾人かであつたからである。

### 三 『アンチ・エディプス』、または方法としての∧分裂分析∨

すでに述べたように、彼らの活動の出発は『アンチ・エディプス』である。なぜ彼らがこのような書物を発表するに至つたか、そして彼らは何を意図していたのかということについてもすでに述べた。そこで我々は、∧多様性∨の哲学の構築という観点からこの書物がいかなる意義をもっているのかを、ここで検討してみることにする。

まず注目すべきことは、彼らが深層心理学で無意識とよばれている精神領域を再検討し、それを∧欲望する機械∨ machines desirantes としてとらえなおしたということである。ここで重要なことは二つある。その一つは∧欲望する機械∨の析出方法にかかり、もう一つは析出された概念∧欲望する機械∨そのものにかかわる。

前者の概念の析出方法にかんじていえば、彼らみずからそれを名付けて∧分裂分析∨ schizo-analyse とよぶ。その名称から容易に想像がつくように、∧分裂分析∨は「精神分析」psychanalyse に対する方法的アンチ・テーゼとして提唱されているものである。無意識の分析はもっぱ

ら「精神分析」によっておこなわれるが、それは無意識にある同一図式を常によみこむことを反復する。すなわちエディプス・コンプレックス、家族間、親子のあいだの性的欲望の葛藤である。「精神分析」はこのエディプス・コンプレックスを無意識のうちにみいだすことで充足している観がある。しかるに、人間のいづく欲望はもつと多様なものである。(例えば生産・創造の欲望、経済的欲望、政治的欲望、また性的な欲望にしても父親・母親以外の異性または同性への欲望など。) それがあるがままの多様な状態で分析し、析出しなければならない。これが彼らの主張である。そして、精神分析のように無意識をつねにエディプス・コンプレックスに還元するのではなく、その多様な欲望があるがままに析出する方法を八分裂分析として提唱するのである。

他方、この八分裂分析によって析出された八欲望する機械は、無意識の欲望の多様性を概念化し、リアルに表現したものである。

ここで八機械とは、通常の用法とちがってかならずしも産業機械を意味しない。八機械とは異質な諸要素の組み合わせのことである。諸部分は全体から独立しており、統一性には還元されることがない。それは「一」とか多とかいった範疇をこえており、ただ八多様性といった範疇だけが、この八機械という概念を説明しうるとされる。たとえば、乳房と産出されるミルク、ミルクをうけとめる口、それらの組み合わせが八機械と呼ばれるのである。八欲望する機械とは八多様性である。そこには中心がなく、異質の諸要素(たとえば、乳房・ミルク・口など)の自由な組み合わせから全体が構成されており、全体はたんに最後に付加されるにすぎないのである。

彼らがこの概念によって主張しているのは、無意識とは静的に構造化されているものではなく、今ここでまさに作動して機能しているものである、ということである。従来、無意識といえは夢や神話などに関連させて論じられるのが普通であった。無意識が表現されるのは、それらにおいてであって、それらを通じて人ははじめて無意識について知ることができる、と。しかしいつてみればそれらは空想の産物であって、その意味で現実のものではない。現実を実現することができないもの・できなかったものがそれらにおいてかたちを結び、表現される。飛躍をおそれずにいえば、それが無意識(の表現)である、ということになる。彼らが反対しているのは、まさにこのような考え方である。まさにいまここで働いている無意識とは、夢や神話といった空想的表現にかかわるのではない。空想ではなくて現実に作用するもの・作動しているものである。そしてそれは工場の機械と同様に、現実的生産を行うものである。だからそれは八欲望する機械とよばれるのである。ここで注目すべきは、ドゥルーズ・ガタリが八多様性の概念を獲得するきっかけになったのが、無意識の分析によってである、ということである。

ある。近代哲学の出発点は人間の意識にあったことは言うまでもない。かれらはその背後にあるものから始めるのである。そしてその作業を通じて、最も貴重な概念を創造するのである。

さてその後、彼らはこの方法を、人間精神の深層の分析だけでなく、さまざまな領域に適用することをころみるようになる。それはまず文学研究、カフカの作品分析に適用される<sup>(10)</sup>。そしてその後『ミル・プラトー』において、自然と文化、实在領域の全体に適用されるに至った。

#### 四 ハリゾーム∨の創造

『ミル・プラトー』とは、自然と文化の∧分裂分析∨、世界の∧分裂分析∨である。ここで我々の前には、彼らによって創造されたさまざまな概念、たとえばハリゾーム∨*rhizome*、∧組み∧*agencement*、∧器官なき身体∨*corps sans organes* などを使って、壮大な宇宙が形成されている。我々は我々の文脈で重要な点をひろっていこう。

なによりも重要なのは、ハリゾーム∨という概念が創出されることによって、∧多様性∨の哲学が見事に定式化されたという事である。先に『アンチエディプス』において、無意識の多様性が∧分裂分析∨によって∧欲望する機械∨として析出・再発見された。∧欲望する機械∨としての無意識の存在論的性格は、「一」でもなく多でもなく、∧多様性∨であった。

彼らはここを出発点として、∧多様性∨の概念の抽象化・普遍化をころみる。すなわち、∧多様性∨の概念を∧欲望する機械∨の存在論的な規定としてのみではなく、より一般的な概念としてとらえなおしてハリゾーム∨なる概念を創造するのである。∧欲望する機械∨の概念から出発して、∧多様性∨の表現一般として普遍化された概念がハリゾーム∨である。ハリゾーム∨とは∧多様性∨の集中的概念表現である。

ハリゾーム∨とは、異質の多様な諸要素の組みみからなる、いかなる中心も原点も持たない、統一性を欠いた絶対的な∧多様性∨である。ハリゾーム∨の特徴は第一に、異質の諸部分・諸要素からなりたっているということである。

第二に、それらの諸部分・諸要素はそれぞれ自由に結合することができるということである。ハリゾーム∨における任意の点は、任意の点と自由に接合することができ、そうすることによって組みみ状態を形成する。

第三に、ハリゾーム∨における組みみ状態において、それを構成する諸要素は全体から独立して自律的であり、いかなる統一性へも従属しな

いということである。多様なものの組込み状態において、それを統一化し、「一」なる全体にまとめあげようとする一者とその運動を排除しなければならぬ。そのことよって始めて「多様性」は実現される。かれらはこのような一者の排除を「Z」 $\vee$ として表現し、「ハリゾーム」をつくりだすための必須条件としている。

第四に、二とは逆に、「ハリゾーム」は任意の点で切断してもかまわない。切ったり折ったりするのも自由である。

第五に「ハリゾーム」は内閉的自己完結的なものではなく、外部にむかつて開かれている。「ハリゾーム」はいわば「外の思考」である。

第六に「ハリゾーム」は複写の対象とはけつしてならず、いかなるモデルとも関係がない。それは再現の対象ではなく、現実の実践において構築すべきものである。<sup>(11)</sup>

「ハリゾーム」とは中心をもたない多様体である。上記の特徴からも、それが「欲望する機械」の「多様性」を一般化し、抽象化して提示したものである、ということがわかるであろう。それは「一」「一者」という原点や中心をもとに、整然たる階層秩序を構築せんとした伝統的な哲学的思考からすれば、まさに反対の「アナキー」なものの概念化の試みである。そして、それがドゥルーズ・ガタリにとっての哲学である。そのころみは無意識の概念化のころみから出発した。そしてそれが頂点に達したところで創造されたのがこの「ハリゾーム」なる概念である。言い換えれば「ハリゾーム」は存在論的「アナルシー」の哲学的概念表現であり、ヘリオガバルスを評してアルトーが述べた言葉を転用すれば、「戴冠せるアナルシー」である。<sup>(12)</sup>冒頭にのべた「多が実名詞の状態にまで高まる」とは、このようなことを指し示していたのである。

## 五 「成立平面」、または内在主義の哲学

ところでドゥルーズ・ガタリはこのような「ハリゾーム」の成立条件として、ある種の平面が必要である、と主張する。<sup>(13)</sup>この内在的な平面を、ドゥルーズ・ガタリは「成立平面」Plan de consistanceと呼んでいる。<sup>(14)</sup>それはまた、「多様性」が存在するところには、かならずその成立の基盤として、「成立平面」が存在する、または同時に形成されるということである。

なぜ平面性がかくも強調されなければならないのか？それは彼らが「多様性」に対する最大の敵を、超越的なものうちに見ているからである。「多様性」は、それを統一し全体化しようとする敵をもつ。全体化・統一化しようとする力は、超越的なものと深く関係している。「多様

性∨の統一化には、そこに階層的な秩序をもうけて上下関係を明確にすればよい。すなわちハリゾーム∨状の∧多様性∨に、ツリー（樹系図）状の階層秩序を導入すればよいのである。それはハリゾーム∨のうちに、上位次元を設けることである。かくしてここに全体化・統一する超越者が登場する。また、おなじく全体化・統一を図る際に、それ自身は不可視の深層構造が要請されることもある。超越者・深層構造、ともに平面の上下に補足次元を設けることによって存在が可能となるものである。したがって、これらの統一化・全体化から∧多様性∨を守るためには、そこに上下の補足次元をつくってはならないのである。補足次元が介入することによって、そこから全体化・統一化がすすみ、補足次元は∧多様性∨の補足次元であることをやめて、その中心となるのである。だからこそ、ハリゾーム∨における平面性が繰り返し強調されなければならないのである。平面性こそが∧多様性∨の多性を保証しているのである。

この平面すなわち∧成立平面∨は、∧多様性∨を超越的なものから守るものである。したがって∧成立平面∨は反超越的である。すなわち内在的であり、内在性を特徴とするのである。ゆえにこの平面は内在平面である。この内在性こそは、∧多様性∨と不可分の状態であり、その思想的条件である。

∧多様性∨の多性があるがままに保持せんとするならば、それを統一化・全体化しようとする運動を駆逐しなければならない。そのためには上位次元や補足次元を拒否しなければならない。階層秩序や超越者や深層構造をみとめてはならない。そのためには多様なものは平面において成立しているでなければならぬ。そこには平面に対して超越的なものが存在してはならない。すなわちそれ自体内在的でなければならぬ。∧成立平面∨はどこまでも徹底して内在的でなければならぬ。さもないければそこにおいてある∧多様性∨が∧多様性∨であることがおかされてしまうのである。かくしてハリゾーム∨と内在性、∧多様性∨と∧成立平面∨とは不可分の関係にあるのである。

ところで∧成立平面∨における∧多様性∨、すなわちハリゾーム∨は、それを統一・全体化しようとする力にたいして、∧脱出線（逃走線）∨ *ligne de fuite* をひくことよって対抗する。遍在する多様なものには、つねに反対の、それらを統一しようとする力がはたらく（可能性がある）。だから∧成立平面∨には、常に補足次元が形成されるおそれがある。しかし統一化の力がはたらく、補足次元が設定されて、全体化が実現していったら、どこかで∧脱出線∨をひけばよい。これが全体化に対抗する戦術である。もちろん∧脱出線∨をひいても、いつも脱出に成功するとは限らない。袋小路に入り込んだり、ブラックホールに吸いこまれるおそれは常に存在する。また∧脱出線∨が、再び全体化の運動にとりこまれ



ることもある（これを彼らは「再属領化」territorialisationとよぶ）。全体化と脱出の運動とがしのぎをけずりあうのが、現実的世界である<sup>(15)</sup>。

ドゥルーズ・ガタリはただだたんに、概念としてアナキーな組込み状態をハリゾーム $\nabla$ として概念化しただけではない。そのような概念を現実化しなければならぬ。現実の世界でハリゾーム $\nabla$ を創造しなければならぬ。 $\nabla$ 多様性 $\nabla$ の概念化の作業は、その前提としておこなわれているのである。だから、つぎのように言うことができるだろう。

ドゥルーズ・ガタリの哲学の真のメッセージは、全体化と脱出の運動がしのぎをけずる現実的世界において、ハリゾーム $\nabla$ を創造せよ、ということである。ハリゾーム $\nabla$ 、すなわち絶対的、多 $\nabla$ としての $\nabla$ 多様性 $\nabla$ を実践的につくりあげてゆかねばならない、という倫理的な主張である。

## 六 $\nabla$ 多様性 $\nabla$ の倫理学

$\nabla$ 欲望する機械 $\nabla$ として具体的に析出された $\nabla$ 多様性 $\nabla$ の概念は、ハリゾーム $\nabla$ として一般化され、ドゥルーズ・ガタリの思想的営為はここでひとつの頂点をむかえた。そして $\nabla$ 多様性 $\nabla$ は $\nabla$ 成立平面 $\nabla$ （内在主義的思考 $\parallel$ 反超越的思考）と不可分であることがわかった。 $\nabla$ 成立平面 $\nabla$ は彼らの内在主義 $\parallel$ 反超越的思考の概念表現である。すなわち $\nabla$ 多様性 $\nabla$ と内在主義とが彼らの哲学の最大の特徴である。しかし以上はまだ、彼らの哲学の存在論的側面である。これと平行して彼らの倫理学が主張される。 $\nabla$ 多様性 $\nabla$ の存在論と同時に、 $\nabla$ 多様性 $\nabla$ の倫理学が主張される。すなわち、 $\nabla$ 多様性 $\nabla$ はそれ自身価値であり、肯定の対象である、という主張である。だから我々は $\nabla$ 多様性 $\nabla$ を積極的に造りださねばならない、実践において $\nabla$ 多様性 $\nabla$ を創造しなければならぬ。そして我々による $\nabla$ 多様性 $\nabla$ の創造行為を妨げるものに対しては戦わなければならない。我々の実践において、全体化・統一化を強いるもの、ツリーの階層秩序をうちたてようとするものは、否定の対象としなければならない、対抗しなければならぬ、あるいはそこから逃走線（脱出線）をひかなければならぬ。これがドゥルーズ・ガタリの実践哲学であり倫理学である。

$\nabla$ 多様性 $\nabla$ をつくりだせ！このようなスローガンのもとに収斂されるこの倫理学は、具体的にはどのようなように生きることをさししめしているのか？

それは第一に自己の複数化である。いいかえれば自己同一的な「主体」としての自己のりこえである。

「一」に収斂する思考をのりこえるためには、まず足元から、自分自身から「一」であることをやめねばならない。それは自己を「一」と考へることをやめるということである。自己を自己同一的な「主体」として考へることをやめるということである。自己をみつめれば、そこにはたくさんの亀裂が生じており、統一としての自己が様々な分裂をかかえていることがわかるだろう。さまざまな想念が浮かんでは消え去り、また再び思い出される。自己とは多様なものの流れではないだろうか？さらに自己の精神には意識的な部分と無意識のレベルがあり重層性をもっている。さまざまな欲望が渦巻き、互いに矛盾し対立しあっているものもある（これが△欲望する機械▽であった）。「一」としての自己とは、このような分裂状態のうえにかろうじて姿をたもっているのではないだろうか？ひとはしばしばこの分裂を否定的に考へる。望ましくない状態と考へる。しかし、価値観を転倒してみたらどうか。分裂を多様性として肯定してみたらどうか。自己に内在する様々な可能性を展開させてゆくのだ。現実の生において、自己の統一を貫くことを尊い事だと考へるのではなく、互いに矛盾しあう行為の方向性を統一することなく肯定すること。多様な生の運動を肯定すること。そこに一貫した自己があるか、とは問わぬこと。自己の分裂を、自己の複数化として肯定すること。それは最終的には自己が自己であるにこだわらないことにゆきつくだろう。自己から脱出線（<sup>16</sup>）を引くこと。そこから出発して、家庭、学校、職場、社会など自己をとりまくさまざまな生活の場において、いわば分裂症的（スキゾフレニック）な遊走を、すなわち多様な生の運動を実現してゆくのだ。

第二に、秩序への志向、とりわけ権威への志向を否定することである。△リズム▽すなわち絶対的な多において、多様なものを統一する中心は存在しない。すべてがそこから出発する原点も存在しない。すべては△中間▽においてある。このような△中間▽においてあり、中心をもたずに全体化されない純粹に多様な状態をどこまでも肯定しなければならぬ<sup>17</sup>。人は生の具体的実践において、このようなアナキーな状態をどこまでも肯定しなければならぬ。中心を欠いた多様な状態に耐えねばならぬ、どこまでも耐えて肯定しなければならぬ。このような状況において、どこかによりかかるべく中心を創ろうとしてはならない。いいかえれば、権威を志向してはならない。また、とりわけ自分が中心であろうとしてはならない。自らが権威となつてはならない。「自己のうちに將軍を自覚めさせるな」<sup>18</sup>

第三に、秩序志向の否定をさらに一歩すすめて、具体的な生の実践において、より積極的に、秩序の中心からもつとも遠いものを目指すこと

である。すなわち△マイナーな▽mineurものをめざすこと。常に△マイナーな▽ものである、というよりむしろ△マイナーな▽ものになること、devenir。大人や、男であるよりも、子供や、女になること。人は仮に今、大人であつても男であつても、はじめからそうだったわけではない。自己のうちにはさまざまな可能性がふくまれている。自己のうちには、男性性と同時に女性性が存在している。大人であることと同時に、子供であることがふくまれている。そのようなさまざまな可能性のなかから、ひとは自己同一性を選択する、というよりせざるをえない。それは自分の意志だけでおこなわれるのではなく、社会的な要請がよく関与している。そのような社会的現実のなかで、ひとは大人になり、男になるのである。しかし人間において、大人や男のうちにも子供や女性が潜んでいる。大人や男であるということは、多様な傾向性のうちから大人や子供であることを選び出しているに過ぎないのではないだろうか？そこでみずからが男であつても大人であつても、みずからのうちに潜んでいる女性や子供を目覚めさせることである。すなわち△子供への生成▽devenir・enfant、△女性への生成▽devenir・femmeを、各々の生の実践において実現することである。さらにいえば、我々が人間であることも、多様な可能性の中からの一つの選択に過ぎないのではないだろうか？人は自らのうちに動物を含んでいるのではないか？そうだとしたら人間であることは、ひとつのこだわりであり、偏見にすぎないのではないか？我々は人間であることを越えるがよい。人間であること、から△動物になること、▽。人が各々の生の実践において△動物への生成▽devenir・animalを実現すること。それはまた文明的にいえば、人間主義（ヒューマニズム）を乗り越えるということである。<sup>(19)</sup>

## 七 戴冠せるアナルシー・負の哲学原理・ポップフィロソフィー

ドゥルーズ・ガタリの作品は、とりわけ『アンチエディプス』『ミル・プラトー』は、疑いもなく独創的な哲学書である。その独創性は、第一に、さまざまな領域の探究を通して△多様性▽の概念化を成し遂げたこと、第二に、内在主義に徹して世界を眺めることによって、反超越的内性の哲学をつくりあげたこと、第三に、人間主義をのりこえ真の解放をめざす△多様性▽の倫理学を構築したことである。そしてその哲学は、△リゾム▽概念の創造において集約され、集中的に表現される。異質な諸要素の自由な結合・分離からなる、平面的で中心をもたない、開かれた△多様体▽としての△リゾム▽は、途方もなく錯綜した生成状態であり、ほとんどカオスと見まごうアナルシトである。すでに我々は、アルトールとドゥルーズじしんにならつてこれを△戴冠せるアナルシト▽と呼んだ。

彼らの哲学は、あたかも八負の哲学原理Vを提出するかのごとくである。なぜなら、伝統的な西洋哲学・思想から見た負の価値を、正の価値として転倒するからである。すなわち「一」に対する多ならぬ八多様性V、超越に対する内在性、ツリーのな階層秩序に対するハリゾームV的なアナルシー、主体の自己同一性に対する自己の複数化、原点や目的に対する八中間V、人間に対する動物、等々を積極的な価値として顕揚することである。しかし、それを負の哲学<sup>(19)</sup>といつても、「反哲学<sup>(20)</sup>」<sup>(21)</sup>といつてはならないだろう。なぜなら、彼らは哲学を尊重するからである。反哲学の徒が、力をこめて『哲学とは何か?』を書き、現代社会の状況を念頭におきつつ資本主義社会の商業主義やその他に対して哲学を擁護し、論理学や科学・芸術に対する哲学の関係とその独自の意義を説く、ということはある<sup>(20)</sup>。たとえそのようなようにみえることが過去にあったとしても、現実にはそのようなことが行われたとき、もはやかれは反哲学の徒ではない<sup>(21)</sup>。

さらに別な面に注目するならば、「すくなくとも権利上は高校生が読者として想定されている」<sup>(22)</sup>「哲学史的・文化的教養が前提とされていない哲学が、『アンチ・エディプス』や『ミル・プラトー』において、形成されている。ピンク・パンサーやエディット・ピアフが登場する哲学書である。ここで彼らによって形成されているのは八ポップフィロソフィーVである。これは、六〇年代末より提起されたカウンター・カルチャーの問題でもある(ドゥルーズ・ガタリのコンビがうまれるきっかけとなったのが、六八年の五月革命であったことを想起せよ)もちろん彼らの哲学とそれを同一視することは早計であろうが、我々はここに深い関係を感じずにはいられない。(このことに関しては後述する。)

ドゥルーズ・ガタリは、「一者」と超越者のたえざる追求であった西洋思想の転倒を企てた。ここにその逆方向への冒険としての八多様性Vと内在主義の哲学が登場する。この哲学は「反哲学」ではないが、どこまでも八負の哲学原理Vを主張する。そこから帰結するのは、「多が実名詞の状態にまで高まる」ような出来事が起こることとしての八戴冠せるアナルシーVである。それはまた蓄積された文化的教養を前提とせず、はだしで、ずかずか生の只中へと踏み込んでゆく民衆の哲学、八ポップフィロソフィーVである。

## 八 ドゥルーズ・ガタリの思想の問題点の検討

では彼らの思想とその意義がこのようなものであるとして、そこにはどのような問題があるのだろうか?

第一に、ハリゾームVとはたんなるカオスであって、それを実践においてつくりだすとは出口なしの袋小路へおちこむことではないか、という批判が考えられる。彼らの思想はいわば哲学的なダダではないか、というわけだ。

ハリゾームVをたんなるカオスと同一視することは避けねばならぬ。ハリゾームVはカオスではない。カオスではなく、 $\infty$ 多様性Vである。異質な諸要素の自由な分離・結合からなる、中心なき開かれた $\infty$ 多様性Vである。限りなくアナルシーに近い $\infty$ 多様性Vである。カオスであれば、主要な特徴をあれこれと分析的に列挙することも不可能ではないか。同様に、もしダダの本質が破壊であるとするならば、彼らの思想を哲学ダダとよぶわけにはいかない。ダダの破壊は創造のための破壊ではなく、破壊のための破壊である。したがってそれは、かたちに残らない。かたちに残すことに意義を認めない。そこにはただ破壊する運動があるだけだ。いったい我々は、否定すること、破壊すること、既成の諸価値をぶちこわすことにのみラディカルで、何のかたちも残さない純粹な否定の運動にどんな可能性を見い出すことができるのか？ドゥルーズ・ガタリは破壊のために否定して、何の肯定的な価値も提出しないダダの徒ではない。ここに彼らの哲学とカウンター・カルチャーの運動とに一線をひかなければならない理由がある。<sup>(23)</sup>

第二に、これとは逆の批判を提起したのはジュリア・クリステヴァである。彼女はラカンの「ボアメロンの結び目」やルネ・トムの「カタストロフの形態論」と共にハリゾームVをとりあげ、人間の意味・言語への隷属をこえるためのこれらの試みが、すでに言語活動（広い意味での理性）に根ざしており、それが巧妙につくられているため、言語・理性からの解放の幻想を与えて、カタルシスと呼び覚ましてしまうこともあるだけだ、と述べている。<sup>(24)</sup>要するに、ハリゾームVは真のアンチロゴスIIカオスではない、といって批判しているのである。そして、そのくせときにそこに到達したような錯覚を与えることもあるから困りものだ、と。しかし、ドゥルーズ・ガタリは言語や理性をカオスによってこえよう、などと主張しているのではない。ロゴスとカオス（または構造とカオス）という対立そのものが無効になるような高次の地平をめざし、そのための戦略的な概念として錯綜したネットワークとしての $\infty$ 多様性VをハリゾームVと呼んでいるのである。ここではむしろ、クリステヴァが暗黙のうちに前提としているような、言語とその外への解放、ロゴスとカオスという理論的枠組みが検討されなければならないと思われる。<sup>(25)</sup>

第三に、先のクリステヴァの批判とも関連するが、彼らの哲学、とりわけハリゾームVという概念の観念性・非現実性という問題がある。一般に哲学者は、実在するものの存在論的構造を、概念によってリアルに表現しようとする。これはいわゆる形而上学・反形而上学の区別を問わ

ない（例えばニーチェの「力」と「意志」の反形而上学）。しかるにドゥルーズ・ガタリの哲学はリアルな実在をえがいているのだろうか？

確かに「欲望する機械」の概念などは、無意識の領域をリアルに概念化しようという努力が感じられる。しかし「ハリゾーム」はリアルというよりなにかひどく観念的な印象をうける。「ハリゾーム」に坎する彼らの説明を読んでも、具体的なイメージがすぐに鮮明に浮かんでくる、という感じはない。けれどもそれは「ハリゾーム」という概念が観念的であるからというより、抽象的だからである。（この場合観念的とは非現実的であることを意味し、抽象的とは現実からの抽象であることを意味する。）

ではなぜ抽象的であることが必要なのか？それは抽象的であることによって、現実のさまざまな場面において活用可能となるからである。ドゥルーズ・ガタリ流に言えば、実践的な「地図」たりうるからである。「ハリゾーム」が現実と遊離した観念であるとはいえない。例えば、よく言われるように、脳の神経細胞を想い浮かべてみれば、シナプスに媒介されたニューロンとニューロンの錯綜した結合状態は、きわめて「ハリゾーム」的ではないだろうか。また自然都市の構造は、人工都市にくらべて「ハリゾーム」状をなしているという研究もある。しかし大切なことは、世界のなかに「ハリゾーム」的なものを探しまわることではない。「ハリゾーム」とは認知の対象ではなく、実践の対象なのだ。そこに存在するものであるより、創造するもの、つくりあげるものなのである。

では「ハリゾーム」がそのような実践的なものであるとして、彼らの主張する倫理学の根拠はどうなるのか？「多様性」が価値であるとして、それはなにゆえなのだろうか？第四に、彼らの倫理学的主張の根拠が問題となる。

市川浩氏も指摘しているように、「ハリゾーム」はデカダンスだ、という評価もありえよう。同様に、例えば「動物への生成」などということとはたんなる退行にすぎないとか、「逃走線（脱出線）」などと言うのは逃避にすぎないとか言う評価は、いくらでもかんがえられる。しかしそれらは旧来の価値観による評価であって、このような評価をうみだす基となっているその価値観を徹底的に批判し、価値転倒を行うことがドゥルーズ・ガタリの哲学のライト・モチーフなのだ。しかしながら、第三者的に見た場合、旧来の価値を転倒するといっても、彼らが提出する新しい価値に何らかの根拠付けがなされていないければ、それらは権利上同格であるはずである。それでは彼らの倫理学を、彼らの存在論によって基礎づけることができるだろうか？すなわち生世界の根本構造が「ハリゾーム」的であるということによって、「多様性」の倫理学を根拠づけることができるだろうか？

おそらくそれは不可能である。なぜならば、世界の根本構造がハリゾームV的であると彼らが主張しているのではないからである。ハリゾームVが実践の対象であることはすでに述べたとおりである。ハリゾームV状のものがある（例えば、無意識の構造、脳の神経細胞の組織、ネズミの巣窟など）というのは、ある部分・領域に限定した上での真理である。もし実在の構造がすでにハリゾームVであるならば、どうしてそれを新たに創造しなければならぬことがある。そうではなくて、ハリゾームVとはある理想であり、理念なのだ。ゆえにそれは価値なのである。それは根拠づけられた、すでにある価値ではない。すなわち、すでに確立された価値ではない。それは我々が新たに創造する価値、新たに創造されゆく価値、新しく生みだされつつある価値である。<sup>(29)</sup>

ドゥルーズ・ガタリの思想は、本質的に実践哲学であり、価値を創造する哲学である。それは世界の存在論的構造の追究に主要な関心があるのではなく、またそこからはじめて一つの倫理学が導きだされるのではない。そうではなくて、第一に∧多様性Vという新たな価値の創造・創出をおこなうのであり、そこに根本的な動機があるのである。

#### 【注】

- (1) Gilles DELEUZE et Felix GUATTARI, *Mille Plateaux*, Les Édition de Minuit, 1980, p. 10. (豊崎光一訳『リゾーム』朝日出版社、覆刻版、一九八七年、一六頁。)なお本論文では以下、MPと略記する。
- (2) 哲学史を「形而上学の克服」という視点で、広大なパースペクティブの下におさめ、論じたものに中田光雄「同一律・理由律・根拠律・差延律」形而上学の克服「管見」(『抗争と遊戯・ハイデッガー論攷』勁草書房、一九八七年)がある。
- (3) MP, p. 13. (邦訳二四頁)
- (4) 宇野邦一氏によるガタリへのインタビュー「スキゾ分析の方へ」『現代思想』第二二卷一一号一三〇―一四頁。
- (5) MP, p. 9. (邦訳一四頁)
- (6) G. DELEUZE et F. GUATTARI, *L'Anti-Œdipe*, Ed. de Minuit, 1972. (市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス』河出書房新社、一九八六年)以下AOと略記する。
- (7) AO, pp. 43-59. (邦訳五一―六六頁)
- (8) AO, chapitre 4.
- (9) AO, pp. 50-51. (邦訳五七―五八頁)

- (10) G. DELEUZE et F. GUATTARI, *KAFKA pour une littérature mineure*, Ed. de Minuit, Paris, 1975. (宇波彰・岩田行一訳『カフカー・マイナー文学のために』、法政大学出版局、一九七八年)
- (11) *MP*, pp. 31-32. (邦訳七七〜七八頁)
- (12) すでにドゥルーズじしんによって、この表現がつかわれている。 Cf. G. DELEUZE, *Différence et répétition*, PUF, 1968, p.55. (財津理訳『差異と反復』、河出書房新社、一九九二年、七一頁)
- (13)  $\wedge$ リゾーム $\vee$ の第三の特徴としての多様性の原理を参照せよ。 *MP*, pp. 14 ~ 16. (邦訳二六〜二九頁)
- (14) *Ibid.*
- (15) ドゥルーズ・ガタリの最後の作品となった『哲学とは何か?』(G. DELEUZE et F. GUATTARI, *Qu'est-ce que la philosophie?*, Ed. de Minuit, 1991. 以下 *QP* と略記する。)は、彼ら自身の哲学の創出というより、哲学に坎んするメタ哲学的な考察が展開されている。たしかに彼らの哲学観は明確に述べられているのだが、彼ら自身の哲学に新たな展開をもたらす内容がある、とは思えない。念のため、その概要を紹介すると、まず「哲学とは概念の創造である」という端的な定義が巻頭で下される(p.8)。さらに続く章で「哲学には創造された $\wedge$ 概念 $\vee$  conceptの他に、 $\wedge$ 内在平面 $\vee$  plan d'immanence」と $\wedge$ 概念人物 $\vee$  personnage conceptuelという合わせて三つの要素が必要である、と主張される。この場合 $\wedge$ 内在平面 $\vee$ とは、「考える」とは何かということを思考に教える思考のイマージュであり、概念の創造を行う場合の大地である、といわれる(pp. 38-40)。また $\wedge$ 概念人物 $\vee$ とは、思考を始めるとき哲学者のなかではたらく人物のことである、といわれる(例えばプラトンにおけるソクラテスや、ニーチェにおけるツァラトゥラ)。そしてそのようなものとしての哲学が、科学や芸術といかなる関係にあるかが追究されている(pp. 62-63)。
- (16) 「人がもはや私といわない地点に達することではなく、私というか言わないかがもはやなら重要でないような地点に到達することだ。」*MP*, p. 9. (邦訳一四頁)
- (17) *MP*, pp. 36-37. (邦訳『リゾーム』九五〜九六頁)
- (18) *MP*, p. 36. (邦訳『リゾーム』八八頁)
- (19)  $\wedge$ 子供への生成 $\vee$   $\wedge$ 女性への生成 $\vee$   $\wedge$ 動物への生成 $\vee$ などについては、cf. *MP*, 101730 — Devenir - intense, devenir - animal, devenir - imperceptible, pp. 285-380.
- (20) *QP*, pp. 15-16.
- (21) 日本ではドゥルーズははじめ主に哲学者ではない人々によって紹介された。そのせいもあってか、当時はフーコーやデリダとともに「アンチ・フィロゾーフ」として紹介された。それがまったく間違っているというわけではない。フーコーはつきりとみずから哲学者ではないと述べたし、デリダ流のデコンストラクションは否定の絶え間ないプロセスを通じて、反哲学的な態度を感じさせることは否めない。しかしドゥルーズに関していうなら、「反哲学」という評価は的はずれである。かれがいかに哲学と、一定の人々ではあるが、いく人も哲学者たちを愛して、彼らについて語ることによってみずからの業績を築いてきたかは言うまでもない。

(22) G. DELEUZE, *Postparlers*, Ed. de Minuit, 1990, p. 17. (宮林寛訳『記号と事件』、河出書房新社、一九九二年、一七頁)



- (23) ただしドゥルーズ・ガタリと筆者では、タダに対する評価がことなる。Cf. AO, p. 486. (邦訳四八二頁)
- (24) Julia KRISTEVA, *Polylogue*. Ed. du seuil, 1977, pp. 476-478. (足立・沢崎・西川他訳『ポリローク』白水社、一九八六年、三五七～三五二頁)
- (25)  $\wedge$ 地図 $\vee$ carteは、モデルの複写である「写図」calqueと対比されるもの。それはモデルをもたず、多様な現実の実験に応じてかきかえられてゆく、開かれた実践的な道具である。地図作製法の原理は $\wedge$ リズム $\vee$ の特徴の一つとされている。Cf. M.P. pp. 19-21. (邦訳三八～四二頁)
- (26) 市川浩「 $\wedge$ 身 $\vee$ の構造」(『講座・現代の哲学』人稱的世界』弘文堂、一九七八年)の第二部、リビングシステムの錯綜性(二二六～一四六頁)を参照せよ。
- (27) 前掲論文、一四一頁。
- (28) 岡本裕一郎氏はドゥルーズ・ガタリの主張の断定的性格、根拠づけの欠如を問題としている。「ニーチェとポスト・モダン」『倫理学年報』(日本倫理学会編)第四一集、一九九二年、八二～八三頁。
- (29) ドゥルーズ・ガタリの哲学が提出する価値観は根拠づけられていない、という批判があるが(岡本裕一郎)、その事実から「根拠づける」という観念からの $\wedge$ 逃走 $\vee$ 、あるいはさらに積極的に言えば、批判を読みとるべきではないだろうか。ドゥルーズ・ガタリの哲学は $\wedge$ 中間 $\vee$ の思想であって、根拠・土台といったものを積極的に排除しようとしているのである。彼らの哲学の根拠の欠如は、「根拠づける」という観念への批判である。

## L'anarchie couronnée

— Essai sur la philosophie de Deleuze et Guattari —

Haruo KOTANI

La philosophie de Deleuze et Guattari est celle de la «multiplicité». Elle diffère du «multiple», concept traditionnel de la philosophie, parce qu'elle ne présuppose pas «Un», ni converge vers «Un» ; elle est le multiple absolu. Dans *L'anti-œdipe*, *Kafka*, et *Mille plateaux*, la démarche de Deleuze et Guattari est de créer des concept pour exprimer cette «multiplicité».

Leur philosophie de «multiplicité» qui a fructifié sous le concept «Rhizome», se trouve dans une position d'immanence excluant toute transcendance. Elle affirme une éthique originale fondée sur la multiplication de soi. «Rhizome» est l'anarchie couronnée (Artaud). La philosophie de «multiplicité» est un anarchisme ontologique. Elle rayonne au delà de l'histoire de la philosophie traditionnelle.

En dernier lieu, nous relèverons certains malentendus à propos de Deleuze et Guattari et quelques uns de leurs problèmes.